

大学における起業家精神の育成に関する一考察

—「起業家」との出会いと価値創造の実践—

山中 昌幸¹、瀧本 往人²

¹大正大学 地域構想研究所 講師

¹大正大学 地域構想研究所 助教

(要旨) 大学教育においてアントレプレナーシップを育成するという試みとその考察は、1990年代から活発になり、一度ピークは過ぎたものの、東日本大震災以降、改めてその意義が見直されている。以前のように、講義と実践によりベンチャービジネスを直ちに立ち上げるのではなく、インターンシップ、ビジネスプラン、ビジネスコンテストなどを組み合わせて、実践中心に行うやり方が一般的になってきている。本稿は、2018年度大正大学地域創生学部の地域実習(中津川班)におけるアントレプレナーシップ育成の取り組みについて紹介するとともに、学生の意識調査ならびに実習プログラムの分析の結果、特に、起業家精神を持った人物との出会いと新しい価値創造の実践がアントレプレナーシップ育成に強く結びついていたことを明らかにする。

キーワード: アントレプレナーシップ(起業家精神)、ビジネスプラン、大学教育、地域創生、地域実習

1. はじめに

大正大学地域創生学部は、都市にある大学が地方に学生と教員を長期にわたって実習に赴き、地域資源の活用による地域活性化や地域人材の育成を目指して、2016年4月に開設された。最大の特徴は、1~3学年において毎年9月末から10月いっぱいを使って行われる「地域実習」という科目があることである。特に1、3年次は原則として同じ地域に入り、それぞれ6週間にわたってじっくりと進められる。2年次は、東京(豊島区、巣鴨)を中心に同期間行われる。

実習を含む地域創生学部の学部教育において目標とされるのは、地域志向(=地域回帰)性を向上させ、地域を愛し、地域に貢献し、地域と共に

生きる人材を育成することである。地方出身学生は、地方の活性化に貢献、都市出身学生は、①都市を生活基盤とし地域活性化に寄与、②都市において地方の活性化に貢献、③地方と連携して都市のために貢献、をそれぞれ目指す。その人材像は、1) コーディネーター、2) アントレプレナー、3) エコノミスト、4) オーガナイザー、の4つの方向性があり、それぞれの方向性から地域経済の発展・活性化を担うことが期待されている。

コーディネーターは、まちづくり人材であり、NPO法人や地域人材養成機関などに携わり、「地域社会の諸主体(産官学民)や多様な分野・専門家を繋いで、地域を取り巻く課題やニーズに対応する計画や連携・共同活動を創出する」¹もので、「関係者の特徴、機能、役割を理解する」ことや「課

¹ 大正大学地域創生学部ホームページ(2016)より。

題やニーズを的確に把握する」「課題解決の糸口となる計画や連携・共同活動を創出する」ものである。

アントレプレナーは、事業推進人材で、起業家や起業支援組織などに携わり、「地域課題やニーズを適切に捉えながら地域の特徴ある資源（地域産業や観光資源等）を利活用して事業創出を行う」人材で、「地域資源や資産、リスク等を踏まえ、事業化に向け、最適化する方策を立てる」ことや「地域資源を活用した事業構想をわかりやすく表現・発信する」ことが目指される。

エコノミストは、経済活動人材で、金融機関やシンクタンク、さらにはメディアなどに携わり、「地域経済の動きや問題を調査・分析・予測し、経済活動に関する課題の抽出、改善案の提言・発信、施策推進の支援をする」もので、「地域経済の動きを調査・分析・予測する」ことや「地域の特性に応じた経済・産業活動による課題解決を提案する」ものである。

オーガナイザーは、組織・団体人材で、公務員や市民活動支援団体などに携わり、「地域社会の様々な人や組織・事業体を繋いで効果的な組織を構築して管理運営する」もので、「効果的組織マネジメントの基礎知識と手法を活用する」ことや「地域活性のしくみや制度を考案・企画する」「地域活性化事業の組織化、事業実践の方策を提案する」ものである。

地域実習の具体的な内容は、それぞれの地域の特性に鑑みて地域ごとに変わるが、全体的には、1年次では地域の強みや資源を発掘・分析する力および活用する力を養い、2年次では東京（豊島区、巣鴨）においてブランディング、マーケティング、プロモーションを学び、3年次で1、2年次の学びを活用した地域創生プランを実証し、4年次ではこれまでの実習内容を集大成した卒業研究を行う。こうした一連の学びを経て、地域経済の創り手を目指す。

創設から3年目に入った2018年度の地域実習は、岐阜県中津川市をはじめとして、宮城県南三

陸町、山形県長井市、山形県最上町、新潟県柏崎・十日町・南魚沼市、新潟県佐渡市、長野県箕輪市、長野県小布施町、静岡県藤枝市、島根県益田市、徳島県阿南市、宮城県延岡市、鹿児島県奄美市の13地域で実施された。

地域実習は、カリキュラム上では6単位の必修科目であり、科目区分としては、「地域創生実践科目群」に含まれている。期間は第3クォーターすべてがこの科目に充てられ、9月中旬～11月上旬のうち、前後合わせて2週間はそれぞれ準備と報告会となっており、現地滞在は6週間(42日間)であり、きわめて長期間となっていることが最大の特徴である。学生6～8人で1グループとなって1地域に入るのが基本²で、そこに担当教員が1、2名、現地スタッフが複数名かかわる³。

とりわけ1年次においては、地域資源情報の収集・分析に主眼が置かれ、地域資源マップを作成するほか、実習成果の報告会（実習地、学内報告会）と報告書の作成を行う。

本稿は、この1年次における地域実習(中津川)で、学生のアントレプレナーシップ育成がどのように進められてきたのか、実際の内容を紹介するとともに、実習内容のどの部分が特に学生に影響を及ぼしたのかをアンケート調査の結果と実習プログラムの比較から探る。

筆者たちは2017年度より実習にかかわり、2018年度は、中津川市の担当教員としてかかわった⁴。ここで、地域の人と共に創る地域創生に寄与する人材、なかでもアントレプレナーシップの育成に力を入れたいと考え、事前の計画から実際の実習を経て、振り返ってみると、一定程度以上の成果が得られたという思いが強い。本稿はそうした実感を、できるだけ客観的に省察し、その成果を、以後の実習に活用できるようにすることが目的である。

筆者の一人である山中は、これまでアントレプレナーシップ育成型のキャリア教育専門のNPO法人を立ち上げ、これまで学生のアントレプレナーシップ育成と同時に企業にも事業開発などの新し

² 2018年度は南三陸町に2グループが赴いた。

³ 実習プログラムの運営協力を行う学習指導講師と実習中の学生への生活支援を行う生活指導員に分かれ、学習と生活

の両面から学生をサポートする。

⁴ 2017年度は山中が地域実習Ⅱ(東京)を、瀧本が地域実習Ⅰ(中津川副担当)と地域実習Ⅱ(東京)を担当した。

い動きに貢献するプログラムを行ってきた⁵。地域実習でも、そうした知見を活かして、学生のアントレプレナーシップ育成にもつながり、地域における「シゴト」づくりの視点からの地域創生にもなる取り組みを行った。

また、もう一人の筆者である瀧本も、大学院修了後に大学で学んだ教員らとともに民間研究機関を立ち上げて取締役となり、大手企業数社との契約により数年間、地域研究や銀座研究などを続けた⁶ほか、外資系企業の日本子会社の設立に執行役員として携わる⁷など、起業経験が浅からずあることから、アントレプレナーシップの重要性について、共感するところが多かった。そのため、中津川の実習においては、学生の地域へのかかわり方を、アントレプレナーの目から入ることを共有事項とした。

以下では、まず、筆者たちが行った地域実習プログラムの概要を述べ、その中におけるアントレプレナーシップ育成の要素を明確にし、そのうえで、実際にどういった結果をもたらしたのかを、実際に作成されたビジネス「プロジェクト」の概要と、実習終了後のふりかえりシートの分析、さらには、他地域を含む実習内容の比較検証から、裏付けをしてみたい。

2. 理論的研究から実践分析へ

これまで「起業家精神」（アントレプレナーシップ）については、生産方法や商品を新たに考案するイノベーションによる機会創出こそが起業家の役割であるとするシュンペーターの定義に端を発しながらも、その後、さまざまな定義づけが試みられてきた(原2002:46)。

実際に、近年では特に経営学分野において数多くの議論が展開されているように、学術的な研究に留まることなく、ビジネスの実践分野で発展を遂げていることから、今後も、理論と実践の両者

を往還できるような研究が求められる。また、「精神」である以上、とりわけ教育現場において育成しようという側面も見逃せない。そこで、以下では、起業家精神の育成に関する研究の動向を、特に教育現場とのかかわりからふりかえっておきたい。

その中でも、大学教育における起業家精神の育成については、今からみると限定的に「大学発ベンチャー」を中心にとらえられていた(栗島2012:141)とはいえ、すでに1990年代後半に一度活発に議論され、授業に関連科目が組み込まれるとともに、実際に起業実践を可能にするための仕組みも考案されてきた(川名2014:59)ことが注目される。

また、ほぼ同時期の1997年は「インターンシップ元年」と言われ、教育現場にインターンシップの積極的導入が進められている。三省(当時の労働省、経産省、文部省)が共同で「インターンシップ推進に当たっての基本的考え方」を発表したが、そこでは、インターンシップは「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」(加藤2007:44)と位置づけられる。ただし、この頃は、起業家精神の育成とインターンシップとは、異なる文脈で議論されており、直接結びついているわけではなかった。

その後、1995年に起こった阪神・淡路大震災以降には、公益を重視する「ソーシャル」なアントレプレナーシップやボランティア、NPOなどへの関心と実践も深まり、さらには、2011年以降は、東日本大震災を経て、「震災復興」や「地方創生」との連関から「起業」が考えられる機会が増し、「起業家の育成」そのものよりも「起業家精神の育成」に比重が置かれるようになる。

また、起業家教育においても、「起業家の育成」に対して「起業家精神の育成」を広義の起業家教育であるとする考えが現れる(大江2004)。この両者の区別には重要な意味があり、近年では、

⁵ 起業家精神を持った若者を輩出することを理念に、2001年にNPO法人JAE(Japan Academy of Entrepreneurship)を立ち上げ、小学生から大学生対象に企業協働など実践型キャリア教育を実践し、10年間で1万人以上の青少年にキャリア教育を提供した。

⁶ 文化科学高等研究院研究事業株式会社にて1991年から

96年まで、飛鳥建設、オムロン、資生堂、富士ゼロックスなどと「都市、建物、空間をめぐる総合研究」「銀座研究」などの共同研究を実施した。

⁷ ドイツ、ボーフム市に本社のあるコンピュータソフトウェア会社G Data Software AGの日本支社であるG Data Software株式会社。

広義の起業家教育に向かっている。現在、大学で行われている起業家教育も、広義の起業家教育が中心であり、起業家を育成しようとするものよりも、起業家精神と形容されるものを育成することに主眼を置かれている。つまり、ベンチャー企業を立ち上げることだけに起業家精神育成の目的を絞らずに、社会人としての活動全体の根幹に起業家精神が位置付けられるに至っている。これはウェバーによる「資本主義の精神」と「起業家（企業家）」が密接に結びついているからである（堀池2014:30）。

それまでの起業家像は、類稀なる才能や行動力を持ち、果敢にリスクにチャレンジするようなイメージを、官公庁や自治体をはじめとして、強調しすぎていたきらいがあったが、もっと等身大の、町工場や自営業店、さらにはNPOや任意団体など、地域社会のスケールで地道に活動する経営者や起業家をモデルとして考えていこうという主張（兼本2016:70）も現れるに至った。

起業家精神については、しばしば天賦の才能に左右されるものだというとらえ方もあるが、ここでは「性格」や「気質」ではなく、「行動様式」の問題であるとドラッカーが述べている（ドラッカー1997:40）ことをふまえて、ごく一般的に、誰もが身に付けられうるもの、教育において育成できるものとして、議論を進めることにする⁸。

ここには、石井(2016)が、従来主流であったシュンペーター型の定義「均衡状態を創造的に破壊し不均衡状態に持っていくアントレプレナーシップ」に対して、カーズナー型の「市場の不均衡状態を均衡状態へ持っていくアントレプレナーシップ」を対置させているように、シュンペーターに代わって、カーズナーによる「機会の発見」という起業家精神への重視が見てとれる。

実際、ふりかえてみると、すでにドラッカーがまとめている起業家精神を生み出す源泉についても、①予期せざるもの、②調和せざるもの、③プロセス・ニーズ、④産業と市場の構造変化、⑤人口構成の変化、⑥認識の変化、⑦新しい知識、

の7点を事例からとらえ直してみると、カーズナー型が実は①から⑥までを占め、⑦のみがシュンペーター型となっており（石井2016:32）、実のところ「起業家精神」とは、カーズナーが指摘している「機会の発見」のほうで、より現実味のあるものであると考えられる。

また、それに伴い、育成プログラムも、これまでのような、単に講座と起業をセットにしたものではなく、ビジネスプランの作成やビジネスコンテストへの参加といった、プロジェクト型のものが主流となる（熊野2016:67）。

まず、2000年代より、大学における起業家教育は、①理論・基礎知識を学ぶ各種の講義型の授業、②実務的・実践的知識を身につけるケースメソッド教育法や問題指向型学習法、事業計画作成演習、③実体験を伴うインターンシップやビジネスプランコンテスト出場、産業人と連携したメンタリング、の3種類に分けられて把握されるようになる（日本インテリジェントトラスト2008:70）。

ほか、学習モデルを使った起業家教育の主な分類としても、①学習転移モデル（教員による講義、ゲストスピーチ）、②経験学習モデル（ケースメソッド教育法、事業計画作成、PBL、シミュレーションゲーム、ビジネスコンテスト出場、バーチャルカンパニー）、③正統的周辺参加モデル（インターンシップ⁹、産業人と連携したメンタリング）、の3点に分類されている（寺岡2007:75）。

このように、大学における起業家教育にもさまざまな手法があるが、その教育効果に関する研究としては、起業家によるゲストスピーチや、ビジネスプランを作成したり、コンテストに出場したりすることなどがよく取り上げられ、それぞれに起業家精神の育成に対して、一定の成果をあげていることが記されている（熊野2014）。

他方、経済産業省では「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として定義し、提唱している「社会人基礎力」というものがあり、その12の能力要素は、起

⁸ 起業家「精神」という語彙自体、持って生まれたものではなく、育て上げるものだ、という意味合いが含まれている。

⁹ 当時のインターンシップは、近年のように「1day インターン」

などのような短期間ではなく、1～2週間程度実施されるものを意味していた。

業家精神を育成する能力と重なる部分が多くなっており、なかでも、起業家教育におけるビジネスコンテストの重要性が強調されている（兼本2016:69）。

また、ビジネスプラン作成を重視する立場（栗島2012:134）もあり、マーケティング的要素と収支などの数値計算的要素の双方を重視するとともに、大学内の活動に積極的に採り入れるべきであるとしている。

なお、学校教育を通じた起業家精神の育成に関する研究は、主に小中高校に集中しており（藤岡2015）、大学における取り組み事例に限りはあるが、それらからすると、前述したようなプロジェクト型ということと、地域の企業との協力体制の重要性を指摘（今永・清水2018:18）するなど、地域活性化と結びついているという点において、かつてのやり方とは性格を異にしている。

「企業等を訪問し、現場でレクチャーを受講したり、就業体験の機会を提供するインターンシップへの参加を通じて、学生自らが事前に情報収集し、調査し、課題を発見し、実体験をした上で、問題解決の糸口を見つけだすなど、自発的な体験を通じて学習する機会がますます必要」（堀2016:39）と考える研究者が多くなっているのである。

ほか、講義形式の科目のほか、インターンシップ、演習、ビジネスプラン、コンペ、そして、「起業プラクティス」を挙げ、ここに、ボランティアやイベントの手伝いなどを含めて全体的な学びを実践するモデル¹⁰も提起されている（川本2011）。

なお、起業家精神に関する研究における今後の課題としては、より多くの「フィールド調査」や「長期間の観測」そして「実証研究」などに研究努力を向けることが重要（原2002:57）とされている。

こうした先行研究をふまえて、本稿では、まず、起業家精神については、事業機会の創出もしくは発見、さらにその前段階、すなわち事業機会

の追求をも包含するものとし、考え方のみならず、行動や実践を伴うプロセスとしてとらえることにする。

また、狭義の起業家を育成ではなく、広義の起業家精神の育成を「アントレプレナーシップ」の定義とする。

そのうえで、大学における起業家精神の育成のプログラムについて、理論と実践といった単純な二分法ではなく、特に、実践については、インターンシップ、ビジネスコンテスト、ビジネスプラン、ボランティアなど、多様な内容を含んだものとしてとらえることにする。

以下では、こうした、大学における起業家精神の育成が実際にプログラムとしてどのように行われ、どのように学生が受け止め、どのような部分が効果をもたらしたのかについて、考察を行う。

3. 中津川地域実習と起業家育成プログラム

筆者たちは、地域実習Ⅰの担当教員（山中が主担当、瀧本が副担当）として、中津川市に2018年9月19日より入り、10月30日に実習地を後にした¹¹。

1年次の大卒のテーマはそれぞれの地域から活性化に利用しうる資源を探り当てることである。そこに筆者たちは、地域の人と共に「シゴト」をつくり地域活性化に貢献することを中津川における地域実習の長期的課題ととらえた。つまり、1年次より地域資源の発掘や再発見といった認識的次元にとどめずに、「シゴトづくり」にまでつなげることを意図的に行った。そうすれば、学生の起業家精神を育むとともに、その地域の「シゴト」の創生にも寄与しうると考えたからである。

地域実習Ⅰは、地域の強みや資源を発掘・分析する力および活用する力を養うのを目的としているが、特に、活用する力として、中津川における実習は総合化と実践に力を入れ「地域シゴトづくり」をテーマとして実施した。何か一つの新商品を開発したり、観光ツアーのプログラムを実施し

¹⁰ このプログラムの延長線上に、大正大学地域創生学部の地域実習があると言える。

¹¹ 学生は、一度も帰還することがなく、教員は、週3-4日程度滞り、数日の休暇をとるパターンを繰り返す。

たりする、といった単発的な作業にせず、地域資源を活用した「シゴト」の創出を実習全体の目的とした。

現在、各地域では地域の持続化のために少子高齢化が加速的に進んでいる対策として様々な移住促進が行われている。特に若者の移住が増えるか増えないかはその地域で「シゴト」があるかないかに大きく左右される。しかし、地域での「シゴト」は公務員、建設、製造、介護関係などの一部の業種に限られることが多く、文系の大卒者が希望するような業種・職種とミスマッチが起こっているのが現状である。そこで、農産物や観光など、地域資源を活かした雇用を創出したり、新たに産業を興こしたりするほか、地元企業の新規事業開発、既存商品（サービス）の販路拡大などの地域経済活動の発展による「シゴト」創りが求められている。

そこで、地域実習においては、こうした、全体的な地域「シゴト」づくりを実践し、「ヒト・カネ・モノ」全体を動かす仕組みを実際に体験するなかで、地域資源の再発見、分析、活用のあり方を学ぶことにした¹²。

当初、一年次の到達目標は、以下のように設定した。

- ・地域の現状を俯瞰的に知り、地域の強みや資源、また課題を抽出するための活動および分析できるようになる
- ・地域資源を活用した地域創生プランを実証し、そこから得られた学びや気づきを明確化し2年次および3年次の実習で活かせるようにする
- ・プロジェクトマネジメント力、コミュニティにおけるマーケティング力、人間関係を構築するチーム外の人材のコーディネータ力およびチーム内においてはチームワーク力の育成

主な内容として、第一に、地域資源の発掘、分析として、付知町地区の探求学習、ならびに、付知町地区以外の中津川市内の探求学習（加子母地

区、馬籠宿等）を行い、第二に、地域資源の活用による新商品（サービス）企画あるいは既存商品のマーケティング支援および販路開拓として、チーム全体で、ツアールートもしくは商品開発の企画をまとめようと考えた。

たとえば、日本の森林浴100選に選ばれた付知峡を活用したリトリートプランや、伊勢神宮の遷宮で使用されたご神木周辺の木を活用した商品開発、である。

また、地域住民との連携を長期にわたって形成するうえで、現地高校生とのキャリア教育プログラムの実施など、現地教育機関との連携による教育プログラムの実施を構想していた。

他方、現地から依頼された解決したい課題として、付知峡近辺のキャンプ場の付加価値向上、付知独自の産品である「さるまい茸」のブランディングおよび販路開拓、栗きんとんのさらなるブランディングおよび販路開拓を求められていた。

夏休み前には、事前学習として『ローカルベンチャー』¹³を読み、地域社会における起業家精神に対する具体的なイメージを描けるようにした。

続いて、第3クォーターがはじまり、オリエンテーションでは、調査の方法やファイリングなどの準備作業やビジネスマナーの研修、そして「中津川検定」の作成¹⁴などを行った。

現地では、市役所に赴き、中津川市長（青山節児氏）から辞令をいただくところから実習がはじまり、中津川市全体の現況や地域資源について学んだ。その日こそ市街地にある宿に泊まったが、3日めの午前には、中心から北方へバスで40分ほどにある付知町に入った。以後は、大半は付知町で過ごし、地域資源の視察や関係者からの聞き取りなどを行い、得られた情報を地域資源マップに落とし込んでいった。また、比較検証のために、加子母や下呂市、箕輪町の視察も行った。数回、市街地に向かい、地元の高中生や大学生との交流を行った。

¹² 地域における「シゴト」の創出は、単に、その地域内で行われるものではない。大正大学は東京（巣鴨）にてアンテナショップ「座・ガモール」を運営しており、2年次の地域実習では、東京（巣鴨）から地域の商品や情報を発信するプログラムを用意している。そのため、地域で「シゴト」を創ることも、東京と

のつながりを前提としている。

¹³ 牧(2018)

¹⁴ 「中津川検定」とは、中津川市の地域資源となりうるものをクイズ形式でまとめたものである。8人の学生が1人あたり6～7点ずつ探し出し、計50問作成した。

こうした、主に、地域資源の抽出や分析とともに、その地域資源にかかわっている方々の「シゴト」と結びつけるために、インターンシップを学生自らアポとりから行い、職場体験を実施した。また、平行して、現地の方と旅行者の地域資源に対する意識を知るためにアンケートや聞き取り調査を行った。もちろん、現地の方々との交流として、食事会やボランティアその他の集まりに積極的に参加した。付知町の中学生との交流も行った。こうした活動を積み重ねていくにつれ、当初予定したプログラムは、大きく変更された。

第1週こそ、地域資源を一通り学ぶ（観る、知る）ことに専念していたが、第2週からは、商工会の指導員の方からのレクチャーを皮切りに、インターンシップの準備に入ったところから、本格的に起業家精神を育成するプログラムとなっていた。というのも、教員側から受け入れ先や予定を組むことを一切行わず、学生自ら、自分の関心テーマを軸にして、地元の店舗や工場、事務所、作業場などに連絡を入れ、翌週の就労体験（インターンシップ）を実施する手筈を整えるように促したからである。当初は、不安もあったが、学生たちが無事に予定を組むことができたため、そのまま、マナー研修なども行い、第3週には就労体験が実施された。自ら選んだこともあり、ただ何かの作業を請われて行うというのではなく、積極的に「シゴト」場にかかわり、働くなかで地域の人と協働で活性化案を考えるという方向に実習のゴールが具体的に見えてきた。

		A	B	C	D	E	F	G	H
10/2 (火)	岩魚の里 峡			○				○	○
	スーパーヤマニシ						○		
	道の駅 花街道付知				○				
	伊那屋		○						
10/3 (水)	岩魚の里 峡	○				○			
	上田屋農園			○	○		○		

¹⁵ 全国つけちレディースクラフトフェア(2018年10月20、21日実施、道の駅「花街道付知」イベント広場にて)のための準備会議が10月10日に中津川北商工会で行われた。

	伊那屋		○						
	早川産業	○				○			
10/4 (木)	道の駅 花街道付知		○						○
	上田屋農園			○	○	○	○		
	森林キャンプ場	○							○
10/5 (金)	おんぼいの湯		○		○				○
	早川産業						○	○	○
	木が大好き早川木工所	○		○					
10/6 (土)	おんぼいの湯		○	○	○				○
	木が大好き早川木工所						○	○	
	森林キャンプ場	○							○
10/7 (日)	岩魚の里 峡		○						○
	新井製材所						○	○	
	宮島キャンプ場	○		○	○				○

表1 就労体験スケジュール(A~Hは学生8名)

就労体験は、一カ所にとどまることなく、数カ所を学生たちが相互に話し合っってローテーションが組まれた(表1参照)。台風の影響で実施が危ぶまれたが、無事に予定通り開始された。

すでに就労体験の5日め(10月4日)には、夜の自主学習時間を使ってビジネスプランの作成にとりかかった。3日後の10月9日には最初のプランの発表となった。一方では、就労場所にて訪問客へのアンケート調査を実施し、また、箕輪町への1泊2日のショートトリップ(10月11~12日)、イベントの手伝いのための会議出席¹⁵、ボランティア参加¹⁶など、過密なスケジュールの合間を縫ってまとめあげ、10月19日には中間発表が行われた。ここでも商工会の指導員ならびに地場産業の支援に精通している市役所の方からの丁寧な指摘が入った。その結果、大枠のテーマや方向性が次第に固まり、10月25日には発表のリハーサルを行い、就労体験に総合事務所を訪れていた中学生たちにもみてもらい、地元の将来を担う者の目から発表内容にコメントをいただいた。翌日の26

¹⁶ 付知川の草刈りボランティアは10月13日に、森林への不法投棄片付けボランティアは10月16日に実施された。

日は付知町での報告会、29日には中津川市役所への報告会をそれぞれ実施し、とりわけ付知町では、関係される方々からの応援メッセージも会場でもいただき、より一層、地域の方との「協働」による「シゴト」づくりを目指していることが強調された。

3. 協働から生まれたビジネス「プロジェクト」

中津川班の最終テーマである「地域しごとづくり」に向けて、学生1人ひとりが地域資源を活かしたビジネスプランを作成した。その結果、当初「プラン」と呼んでいたものを「プロジェクト」と呼び方を変えていった。

各自のビジネス「プロジェクト」をブラッシュアップしていくために商工会や市役所、その他さまざまな方からアドバイスをいただくとともに、それぞれのビジネスプロジェクトに関わる方へ話を聞きに行った。その方々は、最終的には、それぞれのビジネスプロジェクトの応援や協力をしてくださることとなった。

その結果まとめられたのが、以下の、8名による8つの「プロジェクト」の企画である。

<ビジネスプロジェクト一覧>

事業名:つけしよく つけち魅力発見プロジェクト(D)¹⁷

協働者:上田屋農園、伊那屋、スーパーヤマニシ、(株)ごえん、協力者:観光協会

概要:付知町にある魅力的な職場に訪れ、地域の人と触れ合いまちの良さを知ってもらうツアー型職場体験です。

事業名:付知の魅力を皆さんに伝えたい!!プロジェクト(F)

協働者:早川写真館、木工屋小松、協力者:本や+α(三浦祥)

概要:付知の自然豊かで綺麗な風景を付知町以外の皆さんにも知ってもらうため付知の木工製品(パズルやカレンダー)と組み合わせて販売。付知の木と風景のコラボレーションです。

事業名:清潔感!BAR&ゲストハウス(C)

協働者:募集中、協力者:上見屋

概要:綺麗でお洒落な大人の女性受けするバー付きゲストハウスを提案。付知の自然と現代の流行とをマッチさせ、営みたい人募集中。空き家をうまく活用して、移住者促進も促す。私はあくまでも仲介役で、あなたのやりたかったことを叶えます。

事業名:空中散歩アスレチック(A)

協働者:森林組合、協力者:観光協会

概要:付知の美しい自然の中に、付知の地域資源である木を活かしたアスレチックを作るといふものです。付知峡など、他のアスレチックでは見ることのできない美しい景色が見られることを売りにして、独自性のあるアスレチックを作っていきます。

事業名:木で繋げる 付知・東京 接着プロジェクト(E)

協働者:木工の会、協力者:商工会

概要:付知にある木工所同士や木工所とその他の企業の接着剤になる。企業同士が連携し合い、新商品やコラボ商品を開発し、東京で販売する。さらに、東京の流行や傾向を付知の企業に発信すると同時に、付知の商品を東京に発信する情報仲介役の機能も果たす。

事業名:心と体の健康 付知セラピーツアー(G)

協働者:森林組合、観光協会、協力者:観光協会

概要:日々の生活で疲れている人に。付知の自然の豊かさを五感から感じとり非日常を味わって貰う、言わば、付知全体を専門医として、日々のストレスで弱った心と体を癒してくれる体験型ツアーです。

事業名:つけちキッチン つけちと繋がる料理教室(B)

協働者:付知GINZA会

協力者:伊那屋(武田明日香)

概要:付知町の郷土料理を地元の人が楽しく優しく丁寧に教えてくれる料理教室。郷土料理以外にもお菓子や家庭料理、料理の基礎基本など幅広く学べ、お年寄り若い人が交流できる料理教室。この料理教室に通うことで付知町を知ることができ町の人と交流ができる。

事業名:カネになる木(H)

¹⁷ A~Hのアルファベットは構想した学生を意味する。

協働者:つけち木工の会、協力者:付知のみなさん

概要:木材の画像やサイズの情報を提供者から集め、その情報をネットに公開。加工希望者が現れ次第、木工所を含めて具体的な内容の相談を行う。その後、木材は提供者から木工所へ渡り、加工されて、初めて販売に至る。あなたのつくりたいものをつくる、地域内木材循環小遣い稼ぎシステム。

実際には、ここに記載されている内容のほか、以下の項目についても練り上げた。

- ①対象とする地域・コミュニティの概要と地域資源
- ②上記の地域資源を活用し、対象とする地域・コミュニティをどのような状態にしたいか(目指すべき姿、目標、ゴール)
- ③対象とする地域・コミュニティの現状と課題、課題が生じた背景
- ④事業の具体的内容(目指すべき姿にするための取組内容、事業規模等)、販売促進方法
- ⑤推進組織・推進体制
- ⑥工夫した点や独自性など
- ⑦収支計画
- ⑧スケジュール
- ⑨次年度の東京実習で何を検証したいか?

このうち、⑦や⑧については、まだまだ未熟なところがあり、真の意味でのプロジェクト化まではたどりついていないものの、少なくとも、最も重要な、地域の方とともに「シゴト」を考え、つくりあげていくという方向性はできあがった。

このようにして、「地域シゴトづくりプロジェクト」の企画が完成した。実習を締めくくる地域での報告会は40名近くの地元の関係者が集まり、学生の発表に対して地域の方からの積極的かつ親身な意見をいただくなど、一方通行的な学生の発表の機会としてではなく、その地域の未来をともにつくろうという意志を共有した、活発な意見交換の場となった。

特に、地域の方のなかには、「この学生のプロジェクトをぜひ一緒にやりたい」「この地域に必要なプロジェクトだから皆さん一緒にやりましょう」と声をあげる方がおり、学生が発案したプロジェクトが、地域の人を巻き込む力があることがうかがえた。

また、学生による実習の振り返りシートによると、地域の方々から信頼を得ることの大切さや、コミュニケーションをとることの大切さなど、地域の方と協働するうえで必要なことを学生本人が学んだ跡がうかがえた。

4. 起業家精神に対する学生の意識

地域経済の担い手として地域でシゴトを創ることができるようにするとともに、学生の起業家精神を育むような地域実習を行いたい、という目的をもって実施した中津川の地域実習であったが、教員の感触としては、実際に育むことができたという手ごたえをつかんだ。しかし、実際のところどうなのか。また、もし育むことができたとすれば、特に、どういった契機によってなのか。

実習終了後に1年生105名に対して行った振り返りアンケート調査のなかで「本学部が目指す4つの人材像に照らし合わせて、どの要素が伸びたか?そしてその理由は?伸びた要素を○で囲んでみよう」という設問があった。「アントレプレナー」については「地域資源を活用して新産業を興す人」、「オーガナイザー」には「組織内、組織間を調整し、より良い環境を作る人」、「コーディネーター」には「関係者と調整しながらアイデアをとりまとめて推進する人」、「エコノミスト」には「学んだ経済学を課題解決に向けて行動に移せる人」という説明が付されていた。その結果を実習地ごとに分類すると、以下の通りであった。

実習地	アントレプレナー	オーガナイザー	コーディネーター	エコノミスト
阿南	3	2	4	3
阿南割合	42.9%	28.6%	57.1%	42.9%
奄美	1	4	4	0
奄美割合	14.3%	57.1%	57.1%	0.0%
柏崎、十日町、南魚沼	6	3	1	0
柏崎、十日町、南魚沼割合	75.0%	37.5%	12.5%	0.0%
小布施	2	4	1	1
小布施割合	33.3%	66.7%	16.7%	16.7%

佐渡	5	1	0	1
佐渡割合	71.4%	14.3%	0.0%	14.3%
長井	1	4	2	0
長井割合	12.5%	50.0%	25.0%	0.0%
中津川	5	0	4	0
中津川割合	62.5%	0.0%	50.0%	0.0%
延岡	4	4	0	1
延岡割合	50.0%	50.0%	0.0%	12.5%
藤枝	4	3	2	0
藤枝割合	50.0%	37.5%	25.0%	0.0%
益田	3	0	3	0
益田割合	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%
南三陸	3	5	9	2
南三陸割合	17.6%	29.4%	52.9%	11.8%
箕輪	2	4	1	2
箕輪割合	25.0%	50.0%	12.5%	25.0%

最上	2	3	2	0
最上割合	28.6%	42.9%	28.6%	0.0%

(n=105 複数回答あり)

柏崎、十日町、南魚沼が75%、佐渡が71.4%に次いで、中津川は62.5%(8名中5名)が「アントレプレナー」を選択した。13地域中この3地域のみ、「アントレプレナーの要素が伸びた」と回答する学生が50%を超えたことになる。少なくとも、この結果から、半数以上の中津川班の学生に起業家精神が醸成されたとみなすことができる。

次に、こうした傾向がどうして生じたのかについては、実習プログラムとの関係からみることにし、これら起業家精神育成の影響が強かった3つの地域の実習内容を報告書から検証してみた。以下、3地域の実習内容(表2)と学生の感想(表3)をもとにまとめておく。

	総合テーマ	内容	①起業家と出会う機会	②事業開発の機会
柏崎、十日町、南魚沼	特色ある地域創生の取り組みを広域的に比較する	観光・食・定住促進・産業の視点から下記の3地域の比較を実施した。(新潟県柏崎市(11日間)、新潟県十日町市(7日間)、新潟県南魚沼市(22日間))	地域の活性化や課題解決のために事業を起している比較的若い(40代前半)起業家10人以上に会っている。	柏崎での観光ツアーや定住促進ツアーなどを提案
佐渡	ときと金山を視点とした地域資源を見る目を養う	トキ・金山のほかに農業・観光・地域資源の3つの分野を中心に最後に活性化案を提案することをを行った。	公務員、市会議員、事業者など新しいことに広い業種・職種だが新しいことに挑戦している人に10人以上会っている。	観光を中心とした複数のプランや木屑を活用した商品開発など、佐渡らしさにこだわった企画を考えることを行っていた。
中津川	地域シゴトづくり～地域資源活用の協働ビジネスプランを創る～	3年次で実践する地域資源活用の地域の人の協働ビジネスプランを創るために、インターンシップやアンケート調査、他の町との比較を行った。	インターンシップ先を含め地域の地場産業である木工事業者を中心に商店街の若手後継者のグループなど延べ10数社の事業者と会っていた。	すべて自分たちでインターンシップ先の開拓、依頼、実践までを行いながら、地域の事業者と協働の地域資源活用型ビジネスプランを作成した。

表2 3地域における実習の総合テーマ、内容、①起業家と出会う機会、②事業開発の機会の比較

実習地	アントレプレナーの要素が伸びた理由
柏崎、十日町、南魚沼	地域資源を使った新しいものを提案できた。

柏崎、十日町、南魚沼	南魚沼であればスキー場は有明なので、より活性化させるために「ここのスキー場にしかないものをつくりたい。
柏崎、十日町、南魚沼	報告会での提案で地域資源を活用した新たな事業を提案して提案できたため
柏崎、十日町、南魚沼	廃棄されるスイカを利用した新商品の提案が出来た。
柏崎、十日町、南魚沼	自分発想力がすご過ぎて気付いた！いろんなこと思いつく！
柏崎、十日町、南魚沼	伝統産業の着物を使った新提案を思いついて報告会で発表したから。
佐渡	宿根木集落においてのアルベルゴ・ディフーゾの考えを聞いて、新しい観光のカタチを提案できたから
佐渡	そのことだけを考えていたから
佐渡	地域資源を発見し、それを活かす様々なアイデアを出せた。(できるかできないかは抜きで)
佐渡	県外の人々の自然な切り口で資源を見れた
佐渡	観光面から地域創生を考えていくうちにアントレプレナーとしての能力が向上した
中津川	ビジネスプランを作成するにあたって、地域資源を活かしたプランを作ったため
中津川	それぞれビジネスプランを考える上で、地域資源を活かした仕事づくりをすることを意識していたから
中津川	小さな発見でも楽しいと思えた。都会にいたときは感じる事ができなかった想いに触れて楽しいと思えた
中津川	実習Ⅰでの目標であったビジネスプランの提案を通して、今ある地域資源を活用したビジネスプランを考えることができたから。また、私の場合は、今ある資源同士を組み合わせさせたプランを考えた。
中津川	インターシップを通して、個人とのビジネスプランについて考え、自分は、地域資源を活用したものを提案したから。

表3 学生による実習の感想より(一部抜粋)

<柏崎、十日町、南魚沼>

① 地域資源を活用した地域活性化を提案する

1つの物事を突き詰め人に尊敬される人物に対して敬意を表して「変態」と呼び、将来起業しようとしている人を対象とした観光事業企画「変体ツアー～変態の変体に触れて変体しよう～」や、定住促進や産業に関する企画を考案した。

② 地域起業家10人以上と出会う

10人以上の起業家と会った結果、「今後の私たちの生き方や考え方にまで影響させられる」「目指すべき理想像ともいえるような方にも出会うことができ、その方の生き方について詳しく聞いた」「どなたも情熱的に誇りを持って話しているところを見て全然東京の人たちと仕事に対する価値観が変わった」「将来どういう働き方をするのか、(中略)、班全体でも個人でも価値観が変わったことが成果」(実習報告書より)など、多くの学生が人物そのものから強い影響を受けたことがうかがえる。

<佐渡>

① 地域資源を活用した案を常に考える

ヒノキの木屑を利用した商品開発のために実験や値付けなどの実践を行っており、学生からは「0円のものに価値を見出すといった興味深い考えだった」とある。また、観光をテーマに地域資源の発見および活用案を考え、地元から高い評価を受けると同時に課題も見つかり、2年次、3年次への学習意欲につながっている。

② 新しい価値を生み出す人に多く出会う

狭義の起業家ではなく、広義の起業家、すなわち、公務員や市議会議員の立場で新たなことに挑戦している人の話や、廃校を酒蔵にしてすべて地元の佐渡産を使うなど、地域貢献をしながら新たな商品開発に挑戦し、IターンやUターンを積極的に受け入れている経営者の話を聞いて、内容もさることながら、後継問題がないことなど、価値観が変わるような体験をしている。

<中津川>

① ビジネスプロジェクト案を作成する

地域資源を活用し3年次で実践できるビジネスプロジェクトを企画することが最終目標となった。その企画のための就労体験で現場を知り、顧客のニーズも知った。また、アンケート調査における仮説の検証もすべてがビジネスプロジェクトに結び付いていたことを学生が理解し、「自分も動きつつ付知町の皆さんをくっつけていくことによって新たなものを生み出したい」とあるように、今後の展開への継続性と熱意が示された。

② 事業者とのつながりを学生自らが創出した

木工事業者が多いなかで、新しい製品を創り全国的な表彰をされている木工事業者や新しい付加価値をつけることで同じく全国に表彰されている商工会指導員、町の活性化のために挑戦している若手商工会のメンバーなど、新しいことに挑戦し続けている事業者と積極的に出会った。こうした出会いは、自ら就労体験先を開拓した結果であり、ビジネスプロジェクト案の作成においても地元の方との協働を前提としていたため、就労体験後も、最後まで新たな事業者との出会いが続いた。

このように、実習報告書の分析の結果から、実習地によって学習内容は大きく異なるものの、少なくとも起業家精神を醸成したと考えられる3地域においては、①起業家精神をもって新たなことに挑戦している、広義における起業家との出会いと、②ビジネスプロジェクトの立案など、地域資源を活かした新しい価値創造（事業開発、商品（サービス）開発等）の機会の2点が共通しており、この2点が特に学生に大きく影響を及ぼしたのではないかと考えることができる。

7. まとめと今後の課題

参考文献

- 1)粟島浩二(2012):大学におけるアントレプレナーシップ教育の現状と課題: 県立広島大学ベンチャービジネス研究会の活動を中心に、県立広島大学経営情報学部論集、4、131-138.
- 2)石井正道(2016):カーズナー型アントレプレナーシップを促進するマネジメントに関する考察—ピーター・ドラッカーの視点、名古屋商科大学紀要、61(1)、25-33.

以上のように、地域実習において「起業家精神を持った人物との出会いによる価値観の転換」と「価値創造の実践による興味関心の増大」の機会をつくることの両方によって、起業家精神を育むこととなりうる、という知見が得られた。

もちろん、この結果はあくまでも単年度の実習内容とそれに参加した学生によるものであり、長期的に調査を続けると、また異なる結果が生まれるかもしれない。また、学生にもさまざまなタイプがあり、同じプログラム内容であっても、実習地や教員、現地の方々などの組み合わせによって、大きく結果は変わるかもしれない。

そこで今後もさらに、地域創生に寄与する起業家精神とはどういうものなのか、そしてそれを育成する大学教育や地域実習のあり方はいかなるものなのか、検討と検証を続ける必要がある。また、本稿ではビジネスプロジェクト案の作成を一つの目標とした、ビジネスコンテストへの応募を通じた試みも同じような効果があると考えられるため、今後の検証が待たれる。

いずれにせよ大学教育における起業家精神の育成は、これからの時代においても重要な意味を持ち続けるに違いない。本学学部の地域実習のみならず、さまざまな学習プログラムにおいて、起業家精神の育成がよりよい成果をもたらすことを切に願う次第である。

(2018年度の地域実習の実施にあたっては、多くの方々協力なくしては成立しませんでした。ここで、一人ひとりの名前を挙げることはできませんが、今回、地域実習にかかわった中津川市ならびに付知のみなさま、そして、大学関係者ならびに学生のみなさんに、心より感謝の意を表します。本当に、ありがとうございました。)

- 3)今永典秀・清水敬介(2018):起業家育成を目指した地域との協創—滝高校ビジネス部の事例より、グローバルビジネスジャーナル、3(1)、14-19.
- 4)尹敬勲・全福善(2015):起業家精神の形成と教育に関する言説 流通経済大学論集、49(4)、399-405.
- 5)大江健(2004):地域と一体となった、明日の日本を担う「生きる力」を育む起業家教育、中小商工業研究、79、20-30.
- 6)カーズナー、IM.(2001):企業家と市場とはなにか、西岡幹雄・谷村智輝訳、日本経済評論社.
- 7)加藤敏明(2007):キャリア教育の現場から—日本型コーオプ教育の実践と指導法、評価、立命館高等教育研究、7: 41-59.
- 8)兼本雅章(2016):産学連携による商品開発を通じた起業家教育とその効果—学習モデルの視点から、日本情報経営学会誌、36(4).
- 9)川本健太郎(2011):社会起業家養成のための教育プログラムと評価システムに関する探索的研究、Human Welfare、3(1)、123-131.
- 10)川名和美(2014):我が国の起業家教育の意義と課題—「起業教育」と「起業家学習」のための「地域つながりづくり」、日本政策金融公庫論集、25、59-80.
- 11)熊野正樹(2014):ベンチャー起業家社会の実現—起業家教育とエコシステムの構築、ナカニシヤ出版.
- 12)熊野正樹(2016):ベンチャー企業の創出と起業家教育—崇城大学起業家育成プログラム、日本政策金融公庫論集、30、63-82.
- 13)酒井友紀子・高見啓一(2016):イノベーション起業家育成教育—起業家育成プログラム開発に向けて(1)、鈴鹿大学紀要CAMPANA、23、137-156.
- 14)鹿内啓子(2014):キャリア教育の問題点とあり方、北星学園大学文学部北星論集、51(2)、21-31.
- 15)シュンペーター、J. A.(1998):企業家とは何か、清成忠男編訳、東洋経済新報社.
- 16)寺岡寛(2007):起業教育論—起業教育プログラムの実践、信山社.
- 17)寺島雅隆(2008):現代における起業家教育の実現性、名古屋文化短期大学研究紀要、33、22-28.
- 18)寺島雅隆(2013):起業家育成論—育成のための理論とモデル、唯学書房.
- 19)寺田盛紀(2008):わが国におけるキャリア教育の課題—若干の通説的理解を見直す、日本労働研究雑誌、573、54-57.
- 20)ドラッカー、P. F.(1997):イノベーションと起業家精神—その原理と方法、上田惇生訳、ダイヤモンド社.
- 21)中島智子(2007):キャリア教育の導入に関する若干の考察、プール学院大学研究紀要、47、107-123.
- 22)日本インテリジェントトラスト(2008):産学連携による起業家教育の在り方に関する調査報告書、関東経済産業局.
- 23)原憲一郎(2002):アントレプレナーシップの概念試論、龍谷大学経営学論集龍谷大学経営学論集、42(2)、44-57.
- 24)堀真由美(2016):キャリア教育の現状と課題、白鷗大学論集、31(1)、27-42.
- 25)堀池敏男(2014):日本における起業家に関する一考察、京都学園大学経営学部論集、23(2)、27-47.
- 26)藤岡秀樹(2015):日本におけるキャリア教育の研究動向と課題、京都教育大学教育実践研究紀要、15、249-258.
- 27)牧大介(2018):ローカルベンチャー、木楽舎.
- 28)松田修一(1997):起業論—アントレプレナーの資質・知識・戦略、日本経済新聞社.
- 29)大正大学地域創生学部ホームページ(2016): https://www.tais.ac.jp/faculty/department/regional_creation/ (2019年2月20日閲覧)